

幼稚園で子どもはどのように変化するか

ケースの分析——保育効果に関する考察 ①

津 守 真

ここに報告されている事例は発音器官に障害をもつたためにはなすことの困難な子どもである。このような種類の子どもの発音を完全になおすことは困難である。けれども、それにもかかわらず、幼稚園はこのような子どもにプラスにはたらく。それは社会性全般についても言えるし、ことばの面についてもいえる。ことばの指導の第一段階はことばの矯正ではなくて、声を出させることである。周囲に人のいるところで声を出して恥ずかしい思いをすることのないように指導することである。この記録でも、幼稚園にきてはじめてのうちはききとれないような小声でしかはなさない。声を出すようになってからも発音がわるいので、他の子どもたちは「英語をしゃべるのか」とふしぎそうにしている。そして姉が通訳をするような形になっている。おそらく一学期のこの段階には、自分から声を出すことは多くなかったに違いない。この子どもの指導の第二の段階は手術後の期間である。このような手術をしただけでは言語能力は向上しないのはふつうと考えてよいと思う。この期間の指導の第一は先生との間のコミュニケーションをつけて、距離を近づけることからはじまっている。先生は子どもを理解しようとし、しかもききかえすことをしなかった。子どもは先生との間で自分が理解されていること

を感じ、先生との間では自由に声を出すことができるようになっていく。先生がそのような態度でこの子に接していると、他の子どもたちも先生と同じにふるまうようになる。そして妙なことばをふしぎがるだけでなく、理解しようとし、また理解できるようになってきた。このような周囲の状況がこの子どもの言語活動を向上させるのに役立っていることは明らかである。そしてこれは幼稚園のような集団生活の場でなければ与えられないことである。もしもこの子どもが家庭にだけいたとしたら、家庭の中では自由に声を出せ、両親や姉には理解してもらえたらうが、一歩家を出たら、だまりこんでしまうに違いない。家から外に出たとき、そこで苦い経験を積むならば、生活全体がもっと萎縮してしまおう。幼稚園で適切な指導をすることによってはじめて、このような子どもの社会生活が備えられる。この記録ではりっぱに言語指導をし、（それはきわ立って言語指導のようにはみえないかもしれないが）保育効果をおさめていると思う。（このような特殊な例については、幼稚園外の専門的指導をも必要とすることはもちろんである。このような子どもの言語治療については、本誌五十九巻1号——7号を参照されるべしと便利である。）

ささやかな喜び

鈴木輝子

卒園を迎える季節になり、あらためて一年間を振り返ってみると子ども達のなんと成長したことだろうとしみじみ感じさせられる。わけても宏ちゃんが元気に遊びまわっている姿は私の喜びの一つである。この宏ちゃんには、三人の姉があり、一番下の姉である直子ちゃんと昨年四月入園した。はじめ、二人の姉弟を送ってお母様が幼稚園にいらしたが、宏ちゃんはお母様から離れない。しまいには泣きじゃくる。結局お母様はあきらめて姉だけを残して帰る。そんな状態が一週間ばかり続いた。それでお母様と話し合った結果、この子には無理なのではないか、ということ、しばらく休園することにした。時折直子ちゃんは弟の宏ちゃんが、あした、幼稚園に来るって言うてたよ、またお母様も、お姉ちゃん達が学校や幼稚園に行つてしましますと、とても淋しがって、幼稚園のことを話すんです

よ」ということであつた。

あるとき、宏ちゃんのおうちの家庭訪問をした。はじめ、かくれて出てこなかった宏ちゃんだったが、一歩一歩近づいて来て、目を輝かせはしゃいでいる。しかし、私共はここで思いがけないことを聞かされたのである。それは、口を開くと喉のところにさがつて見える喉彦がないため、食物が時々鼻から出てきたり、またそればかりでなくことばがはつきりしないというのである。宏ちゃんの泣声は聞けても、話すことばは聞けなかつた私共は、非常に驚いた。九月には上京して、手術を受けるというので、それまで休園し、無理のない程度に、来たい時、幼稚園によこすようにいつて宏ちゃんの家をあとにした。

四、五月と過ぎ、六月になって子ども達の遊びも活発さをましてきたころ、直子ちゃんから、宏が幼稚園に来たいんだって、私と同じ部屋ならいいといつてるよ」と聞かされて、他の子ども達に対しての不安もあつたけれど、承諾した。他の子ども達には前もつて、みんなは宏ちゃんをおぼえているのでしよう。その宏ちゃんが幼稚園にあし

たまた来るんですつて、でもね、宏ちゃんは喉がスコシ悪いために、みんなのように話せないの、だけど笑つたりしないで親切にしてあげてね」と話しておいた。

翌日は子ども達と共に宏ちゃんを待たされた。直子ちゃんだけが幼稚園に現われた。な〜んだ宏ちゃん来ないのか、”だつて宏つたら明日にするっていうんだもの”そんなくり返しが四、五日続いた。

そんな或る日、子ども達と庭で鬼ごっこに興じていると私の背中をつつく子どもがいる。振り返ると、直子ちゃんをつれて、うれしそうに立っていた。思いがけないことなので、思わず、宏ちゃんの手をとろうとした。よくお母様から離れて来たものと私は一日中腫れ物にさわる思いであつた。姉から片時も離れまいとし、また姉も弟が気にかかるのだろうか、良く世話をやく、姉一人ならもつと自由に遊べるだろうに思うと不憫になつてきた。しかし他の子ども達も姉弟に対し非常に親切であつたのでまず第一日目は無事にすんだわけである。

二日目、昨日同様なんとか宏ちゃんのこと

とばを聞きたいと思つたけれど小声で姉に話すので聞きとれない。三日目、いつもそばについている直子ちゃんが弟のことを忘れたのか、または面倒になったのか姿が見えない。それに気づいた宏ちゃんは泣声で「直ちゃん」と呼んだのだろう。「アアア」に近いようなことばで大声をあげた。その声にすぐに直子ちゃんは戻つたが、子ども達は「先生 宏ちゃん英語しゃべれるの？」と驚いていた。

一日とたつにつれ園に慣れてきたのか、かなり大きな声で姉に話すようになってきた。そのたびに子ども達はふしぎそうにしていた。例えば「僕のだよ」という場合、喉の奥から力をいれたような感じできとばを発し、「オウオアヨ」と聞こえ、子音がはつきりせず、母音だけが聞こえるような発音の仕方である。

やがて夏休みも過ぎて、九月になった。予定通り喉の手術のため上京、そして一ヵ月半過ぎた十月半ばに心配でたまらない私共のところへ帰つて来た。

発音は明瞭になつただろうかと期待しながら宏ちゃんの話す一言一言を聞いたのだ

が、全然以前と変らない。手術さえすれば明瞭な発音ができるものと思つていたので……しかし或る日、出欠を取る時の「ハイ」とか「ナオちゃん」という短いことばが非常にきれいに聞こえるのに気がつき驚いた。

この子には今こそ集団生活という多くの刺激が大切であると思ひ、意識的にではなく自然な状態で話す機会を豊富に与えてやりたいと思つた。

今までは姉の通訳が必要だったが私もできるだけ宏ちゃんの話すことばを理解できるように努めた。漠然としか理解できなくともききかえすことはやめて、すべてが理解できるようにふるまつてみた。宏ちゃんは自分の話すことばがすぐに理解してもらえらと思つたのだろう、自信がわいてきたのか私との隔が一步一歩近づくのを感じた。

クラスでの席は、はじめ宏ちゃんを真ん中に右は姉の直子ちゃん、左はいづみちゃん（直子ちゃんの一歩親しい友達、またひとりっ子のため宏ちゃんを弟のように世話する）という配置にした。そのテーブルは八人掛なので、なるべく親切にしてあげる

ように八人に話した。

十一月下旬になり、直子ちゃんが少しでも見えないものなら泣き出した宏ちゃんも姉のかわりにいづみちゃんがそばにいてくれれば泣かなくなり、またいづみちゃんの姿がなければ、テーブルの八人の誰かをみつけて、その子ども達と遊べるようになってきた。はじめ、宏ちゃんの話すことばをふしぎがっていたクラスの子ども達もよほど理解ができるようになってきた。それでは他のクラスの子ども達も理解できかねていふと得意げに通訳をかかつてでる様子であった。

間もなく十二月に入って姉の直子ちゃんが「宏が勝ちの隣に並びたい」とおしえてくれた。同じテーブルではあるけれど、姉のとなりから向うの勝ちちゃんのそばにうつることは非常な進歩と喜んだ。

もう姉の直子ちゃんが卒園しても一人で通園できるだろう。

発音は未だ完全とはいえないが御両親の努力、そして幼稚園全体の暖かいたわりによって、よい方向へもつていけるのではないかと思つている。

(仙台)